

日本辺境論（内田樹/新潮新書）

赤を見る（ニコラス・ハンフリー/紀伊国屋書店）

Limits of Control（プロダクションノート/ジム・ジャームッシュ（株）ビックス）

郡司ペギオ幸夫

日本辺境論がよかった。そもそも、このわたしを足場とし、窺い知れない外界へ探りをいれる我々は、誰しもが外界に対する辺境者だ。意識や心、生命を理解することは、辺境者を理解することである。しかし常に創造に開かれ、存在＝生成＝不断の起源、を生きる辺境者は、安心立命の境地とはほど遠い。これを嫌って、意識や心、生命の理論は、ほとんどの場合、存在を安定なるものと既定した上で、その成立に至るまでの苦闘・不定さを、進化・歴史の中に封緘せんとする。それは安定を求める理論家のものだ。何をためらうことがあるうか。日本人はそもそも辺境人なのだ、という内田の立論はたのもしい。

辺境人の意思決定過程、それは、足場であるこの私と、外部との齟齬を見出し、絶えず調整し続けることである。二つの描像（内と外）の齟齬・調整は、原理的に不可能で、両者の間にある穴、空（くう）は、翻って実在物と遇される。外部からやってくる未来と、完了した過去の間にある空が、現在だ。空であるからこそ、それは生き生きとしたものと遇される。空が色となることで、過去と未来が接続されたとみなせる。

機思想とは、そういった時間論である。過去とは指し示される事物であり、対象であり、量である。対して未来は、強度であり質である。未来であるところの質を量へと変換し、過去であるところの量と比較する操作が、予測だ。機思想は予測を廃し、予期へと転回する。未来である質を、過去である量と直接接続すること、それが予期だ。しかし量と質の接続はもちろん適わず、齟齬、あいだは、ただ併置され、放置される。だからここに、過去・現在・未来の先後関係はない。隙をみせないこと。それが、予期の成す、いまを生きる術となる。

先後関係のない、このいまと、首を切り落とす刹那の数え上げとの関係は、機思想においてあまり語られない。ドゥルーズなら、接続が適わず蝶番のはずれた第三の時間は、むしろはずれるがゆえに、順序を形作る。読者は、各自考えていけばいいだろう。

空である「いま・ここ」のつくる順序、としての時間は、空であるが故に、客観的時間で評価するとき長くも短くもなる。刀を振り下ろす刹那が、十六の操作として数え上げられる理由はこのにある。空であるからこそ、無根拠に単位となり、反復をなす。空としての現在は、こうして、繰り返され、止まっているにもかかわらず、何かに近づいていく。Limits of Controlは、このような時間そのものがテーマである、ジャームッシュ監督の新作フィルムだ。主人公である殺し屋は、カフェでエスプレッソ2杯を頼み、連絡員から暗号を受け取り、次の連絡員の指示を待つ。この繰り返しの中で、殺し屋は、ターゲットに接近する。冒頭流れる暗示的なセリフや、リンチの影響など、そんなことはどうでもよい。寡黙な恐竜の風情を持つ殺し屋、イザック・ド・バンコレが刻むいまを、我々は耽溺すればよい。

質である未来は、量である過去を凌駕する。だから常に過去を含んだかのような未来、たとえば、過去の連絡員が風景をなすことで、逆に遠い未来を暗示するシーンが、いまを縁取り、境界付け、いまは単位をなしていく。この繰り返しは、2001年宇宙の旅でみたものだ。Limits of Controlは2001年への優れたオマージュではなかろうか。確かに、ターゲットが潜む砂漠の中の屋敷は、2001年の月面基地に似ている。

認知における二つの描像を、知覚と感覚という独立した様式にとらえ、意識に迫る「赤を見る」は、辺境者の思想をもって読み返されるべきだろう。感覚は、知覚からもたらされ後続するものではなく、両者は独立に並存する。だから、いずれか一方が機能を損なっている場合でも、他方が機能することで、広義の認知が成立する。網膜像からの知覚が損なわれていても、見えは感覚として成立するというわけだ。

ハンフリーは感覚と知覚が直列ではなく、並列的であり、分散处理的な全体として意識があるというデネットの意識像に組するようだ。しかし、分散的であるだけが重要なのではなく、両者の齟齬・調停こそが肝要である。網膜像からの知覚が損なわれているとき、聴覚や触覚など、別な知覚が立ち上がり、感覚との、別な齟齬・調停を創り出すのだから。

齟齬・調停は、決して統合されない。両者を統合する中枢があるのではなく、両者の齟齬・調停を埋めたことにする仕掛けが出現するだけだ。統合は、逆説であり、錯誤であり、見かけ上のものだ。意識そのものに迫ろうとする限り、脳はそのような逆説となる。

ハンフリーは、そのような逆説の可能性に留意しつつ、知覚と感覚、その畳重の起源について語る。原生中枢ができ、外界から原生中枢への情報伝達、知覚、に対し、原生中枢から外界への情報伝達が遅くなり、外界へ到達せずにループを成せば、それが感覚となる。こうして知覚と感覚の共立が起源するというわけだ。

このような議論の展開は、原生中枢の起源を進化に委ねる、典型的な進化的描像だ。重要な論点は、歴史に封緘される。ただし、二種類の速度の情報伝達によって、局所的情報処理と大域的な情報処理が出現する点に、意識の原型があるという論点は傾聴に値する。いかなる生命体にあっても、このような二重性が見出され、意識の原型は見出せるに違いない。ただし、議論は最初に戻る。考えるべき点は、二種類の情報処理の共立のありようだ。齟齬・調整としての穴、翻つての實在、という辺境者の思想が、ここには必要となる。

知覚と感覚という二種類の認知様式の齟齬・調停において、不断に出現する空を、實在へと転倒させる。質的時間様相と量的時間様相の間の空が、いま・ここであったように、知覚と感覚の間の空こそ、クオリアではないか。同様に、この私の身体の所有感と、操作感の間の空が、私の意識ではないか。辺境者は、色即是空の夢をみる。